

実践事例
報告

イランの女子生徒と共に学ぶ 「女性の人権を守るために」

世界における女性の人権問題について日本のメディアが報道するニュースや、インターネットから得られる情報には限りがある。そこで、イランの学校に通う生徒とオンラインで共に学ぶ機会を設けた。日本の生徒は、イランの生徒の想いや活動に刺激を受け、日本で自分たちにできることを模索した。本報告では、イランの生徒とのオンライン交流の内容や交流を通して学び、変容した日本の生徒の姿を紹介する。

はじめに

筆者はJEARNを通じてiEARNのメンバーとなり、2014年に「Girl Risingプロジェクト」※を立ち上げた。プロジェクトを立ち上げたきっかけは、マララ・ユスフザイ氏の勇気ある行動に共感し、日本内外で女子教育の大切さについて協働学習する機会を設ける必要性を感じたからだ。2014年度より、アメリカ人の教育者Ed Gragart氏と共にGirl Rising プロジェクトのファシリテーターとなり、「女子教育の大切さ」を学ぶための活動を多国の教員と協力して行っている。

展開

※Girl Risingプロジェクトは、開発途上国で女子がどのような境遇にあり、その中で教育を受けた女子がどのように変化し、周りに影響を与えることが出来るか、現在は9カ国の現状に関する映像を教材として学び、他国の生徒と協働学習を行っている。その中で自国や他国に存在するジェンダー問題を発見し、課題を解決するために立ち上がり、アクションを起こすことを目的としている。



授業で使ったスライド

1. iEARNのGirl Risingプロジェクトを通しての出会い

2014年度より毎年、勤務校の高校3年生英語選択授業「国際理解」で、iEARNのGirl Risingプロジェクトに参加している。昨年度はイランの高校生と協働学習をする機会があった。

Girl Risingプロジェクトのネパールとアフガニタンのストーリーは、児童婚や児童労働の問題を通して女性であるがために現在でも人権を侵害される文化や風習があることを取り上げている。日・イ両国の生徒達は、プロジェクトのプラットフォームを使用して、ストーリーを見た感想や疑問などをオンライン上で投稿し合った。

イランの生徒たちは、自分達も女性であるがために差別を受けていること、それぞれの課題を解決するために自国の人々や周りの国々がどのように接していくべきかを提案した。さらに、自分達が学んだこと、抱えている課題と解決策をまとめたスライドを共有した。それを見て日本の生徒たちは、他国の生徒の考え方やイランの現状についてもっと知りたいと思った。そこで、オンライン交流ができなにかどうかイランの担当教員に打診したことにより、Zoomでの交流が可能となった。

2. イランの生徒とのオンライン交流

1学期の授業は終わっていたが、イランの教師から連絡があり、急遽7月15日(金)21時(イラン現地時間16時半)からオンライン交流を約1時間実施した。生徒は夜に自宅から参加するという点、コミュニケーションは全て英語ということで、全ての生徒が参加することは出来なかった。

はじめお互いに自己紹介した後、Girl Risingプロジェクトを通して学んだことを共有した。次に、お互いの国で、女性の人権が脅かされていることはないかを確認した。イランの生徒は、政府が女性に頭をカバーする「ヒジャブ」を強いている実情について以下のように語った。

「自分の目や身体は自分でコントロールできるので、自分の判断で、頭を隠すかどうか判断したい」、「他のイスラム諸国では、ヒジャブ着用するか本人の意思を尊重している国もある。いつか、イランにもそのような日が訪れてほしい」、「イラン政府は、『ヒジャブ』を付けることは、ただ頭をカバーするという目的ではなく、女性の発言や行動をも抑制する意図があることを知ってほしい」。さらに、「この問題を解決するには、自分の家族や周りの人達が女性の人権や女性の教育の大切さについて間違った思いを持っているなら、それは違うことをしっかり伝えていくことに意味がある。なぜなら、人権を勝ち得るには、自分達自身で理解し、行動で示し、変えていくことが一番早い道のりなのだから」と力強く話してくれた。

それを聞いた日本の生徒たちは、「イランの同年齢の女性達が自分たちの人権を得るために闘っていることを知り、ショックだ」、「他国で起きていることを人ごとだと思わず、国境を越えて他者に寄り添いたい」とそれぞれが気持ちを伝えた。

3. イランの生徒からの問いかけ

日本の女性の地位について聞かれた時、生徒達は日本でも幼い時から男女に対しての固定観念があること、そして日本の社会の指導的地位を占める女性は数は少なく、女性議員の数も一割以下である

■実施日：
2022年6月：iEARNでのオンラインによる意見交換
7月15日(金)：Zoom 交流
10月20日(木) および 11月24日(木)：授業

■対象者：
啓明学園中学校高等学校：高校3年 21名
イラン東部に位置する女子高等学校：生徒 14名

■ねらい：
① iEARNのGirl Risingプロジェクトを通して、SDGs「持続可能な開発目標」の「目標4 質の高い教育」と「目標5 ジェンダー平等の実現」に積極的に関わっていく意識を育てる。→SDGsの実現

②異なる文化、風習、宗教を理解する機会とし、多様な視点やグローバルな視野を育てる。
③他国の生徒との協働学習により、自国や他国に存在するジェンダー問題を発見し、課題を解決するために立ち上がってアクションを起こす原動力を育てる。→21世紀型スキルの習得
④オンラインにおける交流のあり方、コミュニケーション能力を育てる。→21世紀型スキルの習得

■企画、実践者：
関根真理(啓明学園中学校・高等学校)
匿名(イラン東部に位置する女子高等学校)

■使用ツール：
JEARN(ジェイアーン)：NPO法人グローバルプロジェクト推進機構が運営する、世界140の国・地域の学生、教育者が参加するアイアーン(iEARN)の日本センター。
iEARN(アイアーン)：グローバル・シティズンシップの形成を目標として、1988年に設立したグローバルな学習コミュニティ。オンライン上で国際協働プロジェクトを行うプラットフォームとして、「学校と地域との連携」を軸に、200万人以上学生と約5万人の教育者が共に学んでいる。英語を共通言語としながら、SDGsと連動した100種類以上の「アイアーン・プロジェクト」が展開されている。

ことを伝えた。すると、イランの生徒や教員は、改善するために女性はアクションを起こしているのか、男性はどう思っているのかと聞いてきた。この質問には、残念なことに日本側から返答することができなかった。

特に、男子生徒には「男性はこのことをどう思っているのか」と聞いてきた。イランの生徒たちは、女性の地位をあげるためには、男女共に立ち上がって、行動で示すことが大切だ。私たち一人ひとりが、権利を得るために強い意思を持ち、勇敢に立ち上がることが必要だと熱心に語った。

4. 現在も継続する生徒・教員のコミュニケーション

イランの生徒の熱い思いを知った後、2学期になっても日本の生徒たちはSNSで直接連絡を取り合い、イランの状況について確認し、分かったことを授業で共有をした。

9月中旬になり、日本のニュースでもイランでマサ・アミニさん(22歳)が、頭髪を覆うスカーフを適切に着けていなかったとして、道徳警察に逮捕され命を失ったことが報道された。日本の生徒たちはイランの生徒達から、ヒジャブ着用が不適切だという理由で命を落としている女性がマサ・アミニさん以外にも数名いること、オンライン交流した生徒の中にも抗議デモに参加していることを知った。そして、イランの教員からは、「女性に対しての弾圧はさらに厳しくなり、政府に反抗した女性は逮捕されたり、殺されたりしている。私たちのために祈ってほしい。そして、何が起きているかを周りの人達に伝えてほしい」というメッセージが送られて来た。

生徒達は、自分たちにできることは何かを授業で話し合い、この現状を周りの人々に伝える必要があること、また、SNSを利用してさらに多くの人達に知ってもらおうと話しあった。毎回授業の始めに、生徒たちがニュースを紹介し合うのだが、一人の生徒は「ヒジャブの着用義務がイラン社会を引き裂く」と題してヒジャブがもつ意味はなにかを考え直す必要があると発表した。

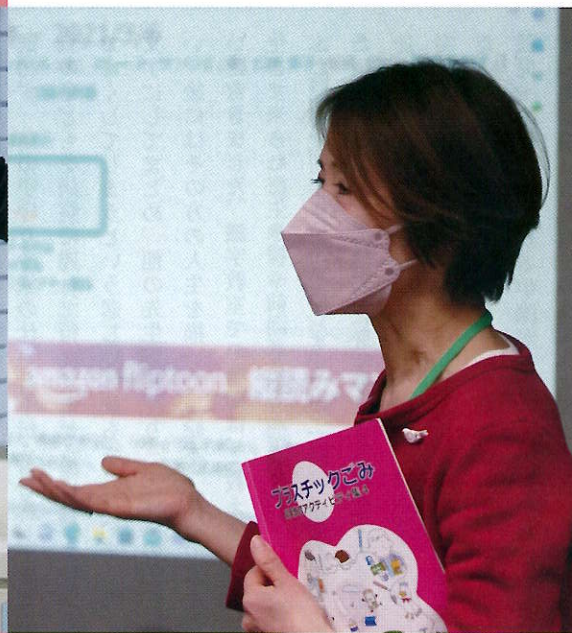
私もイランの教員と連絡を取り続けている。今年4月に来たメールには、インターネットはブロックされておりVPNを購入しないと繋がらないこと、ヒジャブ着用の取り締まりが今も厳しいこと、Girl Risingプロジェクトに参加したいがインターネットが遮断されているうえ、学校でも取り締まりが厳しいため困難であること、ただ、殺害された女性について周りの人々に伝えてくれていることを感謝していること、彼女たちを守ることは世界中の全ての女性を守ることになる、と綴られていた。

日本の生徒たちの感想

- ・オンラインで直接コミュニケーションをとることは、ただ一方的に見聞きするニュースなどで情報を得るよりも、何倍も価値のあるものだったと思う。
- ・生まれた場所が違えば、私も当事者になっていたかもしれないと思った。
- ・たくさん話し合いをして、視野が広がったし、色々な考え方に触れることができた。世界で起きている不条理なことを自分が変えていきたい。
- ・考えるだけでなく、アクションをとることの大切さを学んだ。

実践者の感想

直接現地の高校生と交流することで、生徒達はイランが遠い国ではなく、交流した相手が見知らぬどこかの誰かではなくなり、イランの生徒達が困難な状況でどのように生きているかが他人ごとではなくなった。そして、イランの生徒達が実際に起きている事に対して、ただそれを黙って受けと入れるのではなく、声にあげて、闘っている姿を知り、日本の生徒たちも自ら考え行動することの大切さを学ぶことが出来た。オンラインで現地の人達と直接コミュニケーションをとれるようになった今、このような機会を増やしていきたいと思う。(報告：関根真理)



DEAR News

ディアニュース

vol.212

知り・考え・行動するために
since 1982

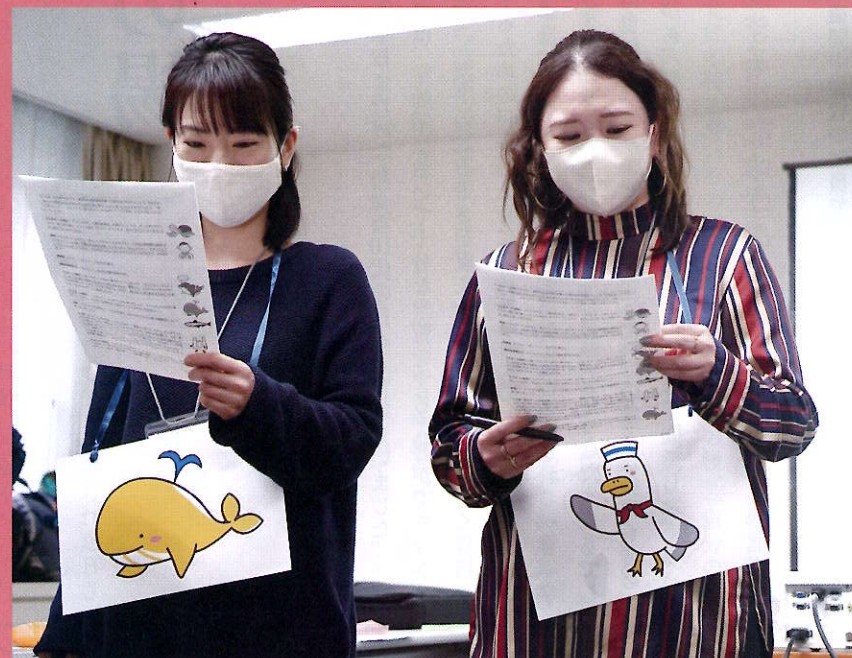
開発教育とは、私たちひとりひとりが、
開発をめぐるさまざまな問題を理解し、
望ましい開発のあり方を考え、
共に生きることのできる公正で
持続可能な地球社会づくりに
参加することをねらいとした教育活動です。

教材体験フェスタを
4年ぶりに対面で
開催しました

DEAR June 2023
開発教育協会

CONTENTS

- 2 特集：識字教室から夜間中学、
そして大阪市西成区での学びの場
- 5 学校で開発教育
不安や葛藤も生徒と共有して
- 6 各地から
- 8 実践事例報告
イランの女子生徒と共に学ぶ人権
- 10 Resources
- 12 DEARだより
- 14 会員になりませんか
- 15 DEARなひと 税所篤快さん
三児の父・長野県小布施町ゼロカーボン推進員



三児の父・長野県小布施町
ゼロカーボン推進員

税所篤快さん

19歳の大学時代、仲間と一緒に、バングラデシュをはじめとする途上国の教育の行き届かない農村部に映像授業を届けるNPO法人e-Educationを立ち上げた税所篤快さん。大学在学中に出版した書籍や講演会を通して、奮い立たされた人も多いだろう。大学卒業後は、株式会社リクルートで先進的にeラーニング事業を切り拓いてきた彼は、今どこで、何をしながら、どのようなことを考えているのだろうか。

現在、三児の父である税所さんが子ども達の寝かしつけをされた夜、取材チームはお話を伺った。

東京から長野県小布施町へ

結婚をして子どもが生まれたことを機に、都会の喧騒を離れて育児をしてみたいと考えた税所さんは、株式会社リクルートを退職し、2021年の夏から地域おこし協力隊員として、長野県小布施町に家族で移住し暮らしている。きっかけは、昔からの同世代の面白い仲間たちが、続々と小布施町に移住し、新たな挑戦をしていたことだった。「東京から長野」へ、「民間企業から地域おこし協力隊」へ、今までの暮らしや収入が大きく変わる不安がある中で、「その時一番心が動いた選択をとった」と話す。

税所さんは小布施町の環境グランドデザインである

DEAR

Development
Education
Association
Resource Center

DEAR News
ディアニュース

212号 開発教育協会

ゼロカーボン(温室効果ガスを出さない町)の実現に取り組んでいる。町の人たちと一緒にどのようにして環境について学んでいけるかを考えながら、環境フォーラムを開催し、町の中で環境問題に取り組む人々たちを取材し、町の新聞やウェブ媒体を通して情報発信をしている。移住者が先導して町の人々を巻き込むとなると、一見ハードルが高いように見えるが、小布施町には外からきた移住者を歓迎するあたたかい風土があるとのことだ。葛飾北斎が晩年に小布施町を訪れ、作品を制作していた歴史から、町の人たちは移住者のことを「今北斎」と呼んでいるそうだ。そんな「今北斎」である税所さんも、「町の人たちのあたたかい歓迎のおかげで、気持ちよく活動することができています」と話す。

認定こども園「大地」との出会い

環境問題にも意欲的に取り組む小布施町には、魅力的な人との出会いもたくさんあるようだ。そのひとつは、子ども達が入園している、認定こども園「大地」の園長夫妻との出会いであった。「大地」は自立した子どもを育てることを大事にしている隣の飯綱町にあるユニークな園だ。スキー場のロッジのような園舎は、30年前に園長が自作。広大な芝生と、自作の遊具が木々にぶら下がる「大地」は「こどもの楽園」のようである。

税所さんは「既存の学力を中心とする教育のあり方に、限界を感じて興味が持てなくなっており、もっと大事な何かがあるのではないかと疑問を抱いている時に、『大地』と出会いました。教科学習以前の人間の根っこの部分を育むという考え方に大いに感銘を受けまし